校長研修だより１０２

授業の基礎的条件

２０２３・５・２　重枝 一郎

７８号において「教科をこえた指導力」について話した。私は，この「教科をこえた指導力」をつかむには，まずは**「授業の基礎的条件」**を意識することが大切だと思っている。

授業をデザインするときには，教育内容を意識することはもちろんだが，学習者を強く意識することが大切だと考える。つまり，学級集団の状態を意識するということである。生徒同士のかかわりが下手だと，学級満足度は下がっていく。すると，やる気も低下していく。これが「意欲からの落ちこぼれを生む」ことになる。

では，**「意欲からの落ちこぼれを生まない」**授業を実現するためには・・・。

裏面に示したように，**「授業の基礎的条件」**と**「授業の内容的条件」**は，相互関係にある。この２つの条件は表裏一体であり，相乗的に成果が出るか，その逆か。どちらか一方がよくなったり悪くなったりはしない。

「授業の基礎的条件」は，授業の目標や内容，方法についての考えや形式にはほとんど関係なく，すべての授業に常に要求される条件である。その条件の適否は，学習の雰囲気，学習規律，そして肯定的な人間関係に支えられている。

例えば，授業で自分の考えを説明したり，互いに自分の考えを表現し伝え合ったりするときは，集団の力学が働き，人間関係の有り様が作用する。「発言する生徒が少なくて・・・」「声が小さくて・・・」といった悩みは，この「授業の基礎的条件」につながっている。

実は，この捉えは校種によって違う。

小学校の先生は，この二つ（「授業の基礎的条件」と「授業の内容的条件」）をまとめて単に「授業」という。担任が一人で二つのことを授業中だけで行うからである。だから「学級王国」という言葉があるようにちょっとした聖域のような場所になりがちである。同じ学年でも隣のクラスに介入しにくかったりする。

中高の先生は，この二つを分けて捉えている。「授業の内容的条件」のことを「授業」といい，「授業の基礎的条件」のことを「生徒指導」という。なぜ分かれるのかというと，「授業の内容的条件」は個でするが，「授業の基礎的条件」はチームでするからである。

ただ，セクト主義という視点で言えば，小と高は似ている。小は担任がやる。高はみんなでやると言うよりは係がやるという感覚である。

中は個とチームの使い分けがスムーズである。でも最近はチームに偏りすぎの面もあり，個の指導力が低下しているところもある。

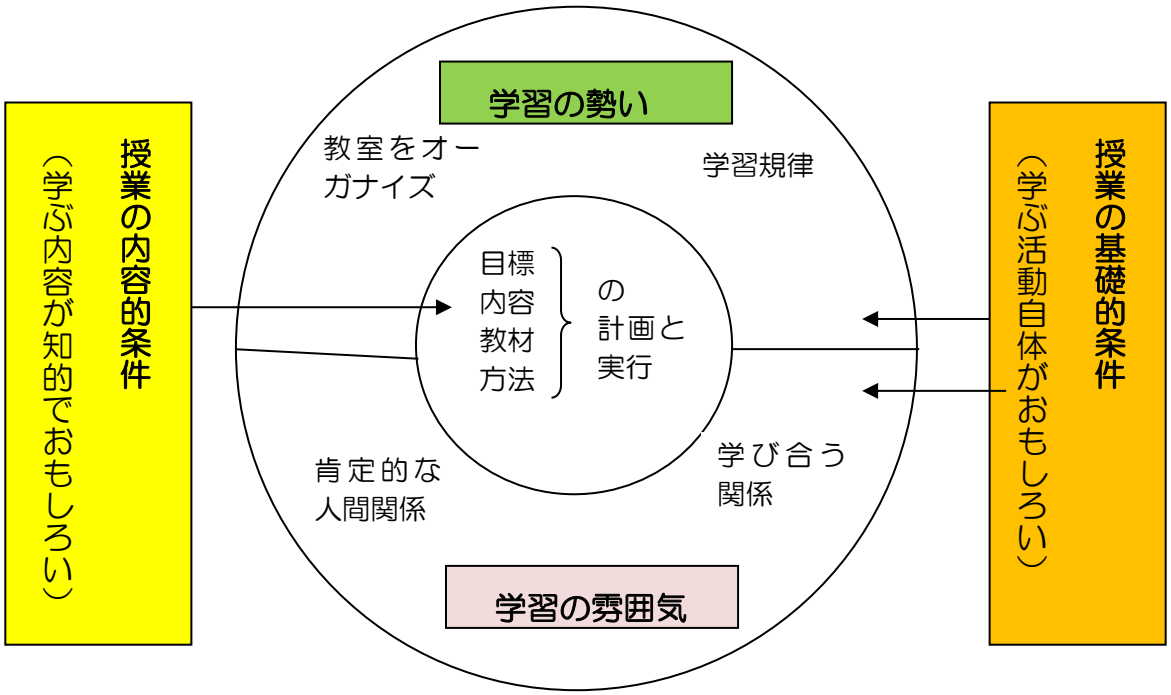
昨今では，中学校の生徒指導のやり方を小学校でも取り入れようとしている。私も数多くの研修会において講師として話すが，なかなか変わることは難しいと聞く。教員の数が少なく，組織的になりにくいことが要因として考えられる。

本校は，中高ということで**「いいとこ取り」**になっているような気がする。ただ，慣

れているからではなく，もう少しこうしていきたいと考えていくことも大切である。このことは，感度の高い主任等が「Love＆Leadership」でやってほしい。

ともあれ，教師の使命は，学校という場所を，生徒たちが成長実感を得られるような場にしていくことである。そのためにも教師は，生徒たちが「学ぶ活動自体がおもしろい」と感じるような指導力を身に付ける必要がある。

その指導力が，「教科を越えた指導力」である。

これを身に付けるために，「授業の基礎的条件」を意識する必要があるということ。

それが，「生徒と生徒」「教師と生徒」をつなぐことになる。